

第五回 盾の勇者

一

むかしのはなしである。

今で言うなら中国のある場所。広い大陸を一人で歩いている人物があつた。北方の草原から、人里の多い南へと。

もちろんそのこと自体は、特に珍しくもない。珍しい点があるとすれば、その背格好であろう——明らかに、幼いのだ。

歩いていたのは十歳くらいの少年だつた。青い麻の衣に、旅草履。背にかけている袋からは、つい最近まで着ていたであろう、皮の上着がはみ出ている。頭に浅い葦の笠、胸には小さな皮袋。その中には何か硬いものが入っているらしく、歩きたび汗になつた衣にあたって、ぺたぺたと音をたてている。

遠くに蝉のわめく声。

空飛ぶ鳥も鳴き声忘れ、

湧水さえも煮え湯のよう。

暑い。つい最近まで北の地にいた少年にとっては、耐えられないほどに暑い。夜中に歩き、昼過ぎには寝る生活がこここのところ続いていた。

二

その日の昼前ごろ。宿が見えてきた。このあたりの宿屋は食堂を兼ねている。麵を作っているらしく、盛んな湯気の中に混じつたつゆの香りが鼻をくすぐる。幸い、少年はまだいくらもお金を持っていた。久しぶりで宿に泊まろうと暖簾をくぐる。

…と、そのとたん、顔の横を何かがよぎつた。背後に何かが割れる音。振り向くと、粉々に割れた焼きものが散らばっている。

「邪魔すんじゃないやねえや！」

カン高い声が少年の耳に届いた。暖簾のむこうで、なにか騒ぎが起こっているらしい。少年は驚いた様子もなく、中へ入って行った。

「こんな幼い娘にいたずらしようたあ、おまえらもう人間じゃねえな。容赦しねえから覚悟しろよ！」

そう言ったのは大柄な青年。彫りの深い、四角い顔。その中で、目だけが鋭く輝いている。まくり上げた袖からは、雑巾を絞ったかのような無駄のない腕。大きめの笠を右手に抱え、左手を広げて何かを庇っている。よく見るとその後ろに、少年と同じくらいの年齢好をした女の子が、怯えた目をして立っている。

「いたずらだあ？ふざけない！俺ツちがんな小娘欲しがるもんかい。その娘を欲しがってんなあ、もつと偉エお方よ。寄越さねえと、てめえもただじゃすまねえぞ！」

こちらは三人ほど。年は青年より上、体格も一回

りほど小さいようだが、手にはそれぞれ剣を携えて
いる。

店の奥では、主人とその妻が抱き合って、ただ震えるばかり。その張り詰めた空気の中、不釣り合いな表情で少年は立っていた。男たちは、それに気付く様子すらない。

三人の男たちは、それぞれ青年を囲むように間合いをとった。その内の一人が、卓の上にあつた井に服を引っかけて、落してしまふ。

がしゃん！

派手な音が合図となつた。青年の正面にいた男が、剣を大きく振りおろす。物騒な刃が青年の顔を襲い当たる寸前、傍に逸れた。男は「まさか」といった表情で、逸らされたわけを探る。そこにあつたものは——葦の笠であつた。

3 第五回 盾の勇者

あまりのことに、一瞬、男の動きが止まる。青年はその隙を見逃さなかった。剣を逸らした笠を、回しながら力任せに叩きつける。強烈な一撃を首に受けた男は、そのまま白目を剥いて崩れ落ちた。

「野郎ツ！」

右から怒声が響く。斜め上から袈裟がけに剣の一撃。その平らな面に添うように出された笠。いくら力をこめても、しよせん剣は長物。横から、しかもより広いものに押されたのでは、真つ直ぐ振り抜くことなどできはしない。とどめを刺そうと笠を持つ手に力をこめた青年は、しかしまだまだ若かった。相手は三人いたのだ。

三人目はさすがに用心していた。声を立てず、素早く背後に回り込むと、剣の柄を腹に押し付け、そのまま体ごと青年にぶつかって行った。殺気に気付いた青年が、目の前の相手を笠の角で殴り倒しながら首だけ振り向く。すでに止められる距離ではない。

避けようにも、剣の先には庇っていた少女。腕の本はやむなし、と刃の痛みを待った——だが、それは来なかった。

迫る刃が、目の前で何かに止められたのだ。勢い余って、柄が男の腹にめりこむ。人とは思えない声を発して、男はそのまま前のめりに倒れていく。その体もまた、地面にはたどり着かなかった。またしても止められたのだ。何か…壁のようなものに。壁に押し付けられた顔が、潰れた饅頭のように醜く曲がっている。

青年は啞然としながらも、見えない壁に手を触れようとした。

「あ、触っちゃだめだよ。ものすごく硬いから、それ」
声の方を向くと、少年が立っていた。手を不思議な形に組んで、なにやら真剣に念じている様子。

「待ってて、いま解くから」

手をすつと合わせる。ぱん、と音がすると同時に、壁にもたれていた男が支えを失い、顔から床に突っ

込んだ。

「へえ…きみ、術師かい？」

青年はさして驚いた様子もなく、ただ確認するだけといった調子で尋ねる。

「知ってるの？」

少年の方がかえって驚いた。いままでの旅で術をつかって、こんな反応をする人なんか見たことがない。同じ術師ならまだしも…

「老師の知り合いにそういう人がいるらしいけれど、目近で見るのは初めてだよ。」

…ま、とにかく、助けてくれてありがとう。僕は武達。きみは？」

「雷遊子だよ」

そう言いながら、少年は襟をうちわ代わりに、ぱたぱたと扇いだ。胸元の汗が、いかにも暑そうである。

「仙人みたいな名前だね。で、その後ろのお嬢ちゃんは？」

雷遊子、驚いて振り返る。まったく気付かぬうち

に、あの女の子は自分の背中に回り込んでいた。

「彩花よ」

少女は、倒れた男の一人を、爪先でつつきながら答えた。雷遊子よりちよつと小さいくらい。小さな顔に、大きな目、それでいて全体としては整った顔立ち。

あまり長くない髪は木の櫛で止めただけ。上等ではないが、清潔そうな木綿の服を、白い布地の帯で押さえただけの姿——ひどい格好ではないが、なんとなく寝起きのまま立っているように見える。そのせいか、あるいはいままで、自分と同じくらいの歳の女の子を見たことがないためか、雷遊子は少し落ち着かない気分だった。

そんなことにはまったく構いなく、少女は口を開いた。先程まで震えていたとは思えない、しっかりと口調で

「まったく、かれんな女の子相手に剣振り回すなんて、どういう神経してるのかしらね！」

5 第五回 盾の勇者

「どれだけついても男が起きないのを見てとると、大きく足を振って、その頭を蹴り飛ばした。それで気が治まったのか、呆気にとられる二人に振り返ると、天女のように微笑む。

「救ってくれてありがとう。二人ともすっごいのね」
おもわず雷遊子は思った。

(こわいな、この子——)

三

術師。歴史の表舞台には、決して出てこない存在。己が生き延びるため、空魔という敵にひたすら立ち向かい続ける者たち。雷遊子は、その衝派術師の見習いである。

もちろん、いくら術師見習いとは言え、十歳とっに満たない子供を一人で修業に出すなど、考えられないことではある。雷遊子にはやむを得ざる事情があった。胸の皮袋に入っているのは、衝派の呪具の中でも

最強と言われる緑宝寺盤印りょくほうじばんいん。しかし長い月日の間に、その使い方は忘れ去られてしまった。今や知る者はただ一人——北岩の術師と呼ばれる人物のみ。この人物に会うために彼は、この広い中国大陸を旅していたのだ。つい数ヶ月前までは師の妙漣みょうれんと共に、そして、いまは一人で。

彼の師は、いま十一年前に倒したはずの宿敵と相対している。いつか必ず会えると信じて、彼はただひたすらに、与えられた仕事を果たそうとしているのである。

四

武達は店の亭主にいくらかの金を握らせると、二人の子供をつれてその場を立ち去った。渡した金は、食事代に割れた椀の代金、それに迷惑料が少し。細かい持ち合わせがなかったので、入り口の脇に積んであった蒸したての饅頭を三つ四つ、釣銭代りに失

敬するのも忘れない。

店を出て五刻ほど。小高い丘の上で、三人は円のように座り饅頭を頬張っていた。腹もくちくなくなつた頃、武達が口を開いた。

「雷君、と言つたね。きみはどこへ行くの？」

雷遊子は懐から印を取り出すと、しばらく眺めてから口を開いた。

「この…近くだね。朧たんがいさんつて言う、武術の達人がいるんだつて。その人に会いに来たんだ」

武達が、おや、といった顔になる。

「武術の達人で、朧たんがいだつて？…ひよっとすると、朧たんがいげんぼう玄跋げんぼうつていう人かい？」

「そう、その玄跋さん。知ってるの？」

青年は起こしかけた体を倒して言った。

「やれやれ、妙な縁だなあ。その人は僕の老師だよ、それ、あそこに見える町のはずれに住んでおいでだ」

指の指し示す先を、少年の目が追つ。

「僕は別に用があるから、ここでお別れだね。朧老師にお会いしたら、近々立ち寄る機会があるだろうから、よろしくと伝えておいてくれないか。

あの人は、皇帝からのお召しさえ、気が乗らないと言つて断るくらいだけど、僕の知合いなら、多分会つてくれると思うよ」

彩花は、二人の話しを傍わきからただ眺めていた。その視線に、たつた今気がついたように武達が振り向いた。

「きみはどうするの。近くの村なら、送つてあげてもいいけど」

少女は少し顔を曇らせ、ふう、とため息をつく。

「それが、わからないの。今まで村の外に出たことがなかったし、

…ほんとにいきなり、こんなどこに来ちゃったから、どこへ帰ったらいいのかさっぱり…」

「おかしな話だけど…まあ、わけがわかるまで少し落ち着いた方がいいね。さっきの連中が、また来

7 第五回 盾の勇者

ないとも限らないし。

…雷君と一緒に、聆諧老師の許に身を寄せるといい。一筆書いてあげるよ」

懐から黄とも茶ともつかない色の紙を取り出すと、腰帯にはさんであつた小さな筆で、なにやらさらさらと書いてゆく。雷遊子はそれを、不思議そうな目で見つめていた…彼が紙を見るのは、これが初めてなのだ。

「そら、これでいい。じゃ、僕は少し急ぐから、これで失礼するよ。十日くらいしたら僕も老師のところへ行くつもりだから、そのときまた…じゃ、元気でね」

言い終ると立ち上がり、子供たち二人に手を振って立ち去った。

武達が見えなくなる。ふと振り向くと、目の前には饅頭がまだ一つ残っている。雷遊子はそれにひょい、と手を伸ばした…だが、手が届く前に饅頭は消

えてしまう。彩花が横からつまみ取ったのだ。

「いけないのよお。一つしかないんだから、二つに分けなきゃ」

小さい子を叱るような口調に、雷は頭を掻いて謝つた。彩花がそれを見てきゃらきゃらと笑つ。つられて雷遊子も笑つた。

二人はその饅頭を半分づつ平らげると、町へ向かつて歩いて行つた。

五

町はずれ。聆諧の家はすぐにはわかつた。活気のある町に似合つた、大きめの屋敷。そのわりには門や飾りに凝るわけでもなく、中はただ広いだけで、がらんとしてゐる。主を呼ぶつと雷遊子が息をすつた瞬間、どこからか声がした。

「武達の知合いかな。さ、遠慮せず入りなさい」
びっくりしてあたりを見回す。が、誰もいない。お

そるおそる中に入つて行くと、突然目の前に人が浮き出した。

雷遊子がとつさに手を組み、結界を作るつとす。彩花はその背中にしがみつきながら、目は目前の人物から離さない。

「これこれ、術など使つてない。わしは朧諧玄跋じゃ。お前さんたちは、わしに用があつてきたのじゃないのかの？」

少年は結界を解き、朧諧を名乗る男に近付いていった。そこには、一人の老人が目をつむつたまま座っていた。背格好は雷遊子よりふた回りほど大きいくらい。しわの中に埋もれた目鼻。うなじのあたりできつく縛つた白い髪。目の詰まつた木綿の着物に、麻のはおり。薄暗いので、色まではわからない。

老人が目を開けると、温和そのものといった顔で、二人の子供を眺めた。何もかも見通すよつな、深い目の色。

ここで初めて、雷遊子は自分の目的を思い出した。

懐から手紙と竹簡をひとつづつ取り出すと、棒読み調の挨拶を述べながら老人に手渡した。

一通は、先ほど武達青年からもらった紙の手紙。

もう一卷は、ずつと北の地、草原のただ中にいた彼の師の友人、岳生から預かつた竹簡。こちらの手紙を朧諧に渡し、その教えを受けるため、彼はわざわざここまで来たのである。

朧諧は二つの手紙をざつと読むと、まず彩花に向き直つた。一言二言話すと、奥の方につれて行く。再び現れたときには、その腕にいくつかの道具を抱えていた。

「あの娘は、しばらくここに住まわせるとしようかの。自慢するわけではないが、わしを知っているなら、まず襲つてなど来るまいて。

さて…岳生の方じゃが、だいたいの事情はわかつた。要するに、戦いの基本がなつてない、ということとのようじゃの。たしかに、そうなるとあやつでは

9 第五回 盾の勇者

教えきれんじやろつ」

腕いっぱいに抱えた物を、雷遊子の前に放り投げる。よくよく見ると、それはすべて武器であった。剣、刀、^(注)槍、斧…その中で、ふと少年が目を止めたものがあつた。聃諧も、その視線に気がつく。

「ほう、盾がよいか。ずいぶん珍しいの」

「あの、武達さんが笠で戦つてたの、盾でも出来るかな、と思つて…」

言いながら、なにかとんでもないことを口走っているような気がして、雷遊子は赤くなりながら口を閉ざした。老人はその様子を面白そうに眺めている。

「武達の盾はチト乱暴じゃでな。わしとしてはあまり薦められん。が、盾というのは決して悪い選択ではないぞ」

不満そうに見上げる雷遊子。その顔に、聃諧が笑い声を上げた。

「ふおふお…別に、馬鹿にしたわけではないで。むしろその逆じゃ。盾を使うのは、大人には難しいん

じゃよ。とにかく、柔らかい身体と細かい動きが要る技じゃでな。

では、チト見本を見せるとするかの」

老人はそう言うなり、すつくと立ち上がった。ただ腰を上げただけなのに、その左手にはいつの間にもやら盾が吸い付いている。あつけにとられる少年を尻目に、左手が動きだした。

前へ伸ばす。肘を引いて縮める。縮めたはずなのに、盾の位置は変わらない。身体が前へ動いたのだ。足などまるで動いていないのに。

「これを静歩という」

雷遊子はふうんという顔で見ている。

「どうもわからんようじゃな。では、これならどうじゃ」

言うなり、少年の目前に盾が突き出される。反射的に払いのけると、そこには聃諧の顔が迫っていた。

「長物の武器、すなわち刀剣や槍の類は、この間合いではまず使い物にならん。じゃが盾は、わしの盾

は、この間合いからが勝負じゃ」

少年の驚く顔を、底知れぬその目で嘗め回すかのように見つめると、にやりと笑って顔を離す。

「『盾三法』というのがある。知っておるか」

少年は首を横に振った。老人は地面に三つの文字を書く。

『受』『流』『弾』……

「なに、簡単じゃ、これだけじゃよ。相手の武器を受け、動きに逆らわず『流』し、そのまま『弾』き飛ばす。

——じゃが、これは盾のほかに武器を持ったときのことじゃ。普通はこれでもよいのじゃろうが、わしの盾は盾だけで攻める。そこでじゃ……」

老人は、さらに文字を書き足した。

『吸』『転』そして『撃』……

「盾の動きを相手にあわせ『吸』いつくかのように

自在に導き、その力を逆に相手に『転』ずることによって封じ、そして盾の一『撃』を食らわせて倒す。

これが、わしの盾じゃ。先の『静歩』は『吸』と『転』の基本じゃて」

「こんなに覚えなきゃいけないんだ……」

はあ、とため息をつく雷遊子に、老人が微笑みながら言った。

「実は、こんなものは覚えるものではないのじゃよ。世に武術の使い手は多くあるが、ほとんどはただ師の教えを継いでおるだけだな、自分で考えることをせん。いま言ったのも、そういう馬鹿者のために、教えやすくするための方便に過ぎん」

少年は不思議そうな顔で聞いている。その頭を撫でながら、老人は話し続けた。

「単に武術を教えろと言つたら、今言ったことだけ、たたき込んでしまえばよいのじゃがな、それでは本当の『戦い方』なんぞ一生かかってもわかるまい」

腕につけていた盾をはずし、その顔を少年の顔に

11 第五回 盾の勇者

近寄せる。

「風林火山の法というてな。」

防^{まも}つては、

風のごとき疾^{はや}さを内に秘め、

林のごとき静かに待つ。

ひとたび攻^せむれば、

火のごとく止^{とど}まることを知らず、

山のごとき一撃をもって倒すべし。

これがわしたち本来の戦い方じゃて」

少年は言葉の一つ一つを、噛みしめるように聞き

ながら、それでも疑問が頭をよぎった。

「攻めるだけじゃいけないの？」

「いやいや、攻のみを採^とるとしてもな、

風あらば火は勢いを増し、

林あらば山は富む。

というものじゃ。

相手の勢いに止められず攻め続けるには、どうしても疾^{はや}さが要る。いかなる恫喝^{しゆくわく}にも耐え抜く胆力は、絶対の一撃になくってはならぬものだ。

これすなわち

風なき火は一椀の水に消え、

林なき山は一陣の風に崩れる。

の道理。難しいかの？」

「うん」

雷遊子の額に、箸^{はし}が挟^{はさ}めそうなくらいの縦じわができた。

「焦ることはないぞ。お前さんはまだ小さい。わしが本当の基本を教えてやろう。お前さんは旅せねば

ならんのだろう？ 岳生が言つよつに、これからも争いごとに巻き込まれるようなら、後のことは自然と覚えて行くじやろうつて。まあ、覚えねば死ぬだけじやての。

では、早速はじめるかの。雷遊子、こつちに来るんじや」

六

静かな部屋の中、流れるような一連の音が、あたりにこえました。

トーン…トツ、パーン…

暫くしてまた同じ音が響く。

トーン…トツ、パーン…

「いい音ですね。老師」

笠を浅くかぶつた青年が、老人の横に腰掛けながら言つた。

「おお、武達かい」

「しばらく来ないうちに、また弟子でも取つたのですか？ こゝからでは見えませんが…」

老人は目を開けようとししない。し、わのわずかな動きで、微笑んでいるとわかるだけである。

「何を言つておるやら。あの子はお前が紹介したんじやろうが」

「え…と言いますと…まさか雷君、雷遊子？——しかし、あの子はまだ来て十日あまりしか…」

「うそだと思つたら、行つてみるがよかる」

不審そうな顔で奥へ向かう武達に、後ろから声が飛んだ。

「不思議に思つたら、足を見ることがじゃな。めつたに拝めぬ『天賦の才』というものを見られるぞ」

振り向きもせず頷くと、敷居をくぐつた。

奥の方に、一人の少女がいた。野菜でも入っているのだろう、腰ほどもあるか、この端に腰をおろして、

13 第五回 盾の勇者

何やらじっと眺めている。

武達は、その子に向かつて手を振った。彩花である。少女はそれを見てにつこり笑うと、また元の方
向に視線を移した。

視線の先——広い空間の端の方に、柵のような物
がある。高さ一丈余り、大人が四人乗れるくらいの
広さ。横にかけてある梯子はしこを伝つたって、雷遊子がその
柵に登っていた。

柵で少年は前を向く。そこには大きな、ぶ厚い板
がぶら下がり、その下には盆のような板が敷かれて
いた。そこへめがけて、少年は勢いよく飛び込んで
行く。

武達は知っていたのだが、その足元の板には仕掛
があった。それは少年の足の力を受けてゆらゆらと
揺れ動き、その体を絶えず倒そうと試みるはずであ
る。——だが、そうはならなかった。少年は板が揺
れ動く前に、正面の板を手のひらで打ちさえ、板の
動きを完全に消し去ってしまったのである。

武達には信じられなかった。雷遊子がまだ子供だ
からというのではない。自分が数年かけて会得えとくした
ことを、十日足らずで覚えるなど、彼には考えられ
なかった。

「雷君！」

梯子を登ろうとした雷遊子は、その声でようやく
青年に気がついた。

「わるいけど、ちよつと来てくれるかな」

先程からこの修業を続けているのである。赤く
なつた手を擦こすりあわせながら、少年は武達の前に立
つた。

「すまないけど、足を見せてくれないかい」

少年は不思議そうな顔をして、それでも素直すそに裾
をまくる。薄暗い中に浮び上がった二本の柱に、
武達は仰天した。

（足か、これが？）

それはまさに、柱と呼ぶに相応ふさわしいものであった。
少なくとも、その小柄な体からは想像もつかない。

じつと見つめていた彼の耳に、以前聃諧から聞いた話が蘇よみがえってきた。

『術師のうち、守りを主とする結界の使い手は、自然と「不動の力」を身につけるものだそうじゃ……』
 そうか、とかれは思った。十日で会得したのではない。この足は、おそらく数年をかけ、術師として培つちかってきた彼の宝なのだ――

「足が、どうかしたの?」

「……いや。悪かったね、修業の邪魔をしてしまって」
 青年は、頭を振りながら、その場を後あとにした。雷遊子はその後ろ姿へを不思議そうに見ていたが、再び柵の上に向かつて行く。奥の方では野菜かごを抱えた彩花が、その姿を飽きもせず眺めていた。

門の手前では、聃諧がまだ陽ひに当たっていた。目をつむり、眠っているようにも見えるが、そうでないことは、武達が一番よく知っている。

老人のそばを通りすぎるとき、彼は吐き捨てるよ

うに言った。

「少々長めの修業に出て参ります、老師」

聃諧は薄目を開けて、青年の後ろ姿を見送っていた。満足げに、微笑みながら。

七

「聃諧老人の御宅とお見受け致す」

野太い声が、そこらに響いた。武達が去って一月ほど後のことである。

「なんじゃな、騒々しいが」

門の手前に現れた聃諧は、そこにいた二人の男を見て、やれやれと頭を搔かいた。

「おお、聃諧玄跋老でございますな。お初にお目にかかり申す。私は禁軍きんぐん武術ぶじゆつ指南殿しゆんたむの使い、王史栄おうしえいと申します。

実は指南役、先頃病にてお努めあいならず。後任を早急さうきゅうに決めねばなりません」

15 第五回 盾の勇者

老人は、男の話しに大きなあくびで応える。

「また、皇帝陛下の気まぐれかの。前にも言ったが、わしはお断りじゃ」

「は、承知しております。…しかしながら天下の禁軍を指南するお役目。それより優れた武人が野にいたなど、許し難きこと、という天子のお言葉あり申した。重臣一同協議の結果、我らの選んだ武人が、ご老人に優るならば、ご納得も頂けようかと…」

一見、礼儀正しく聞こえるが、彼の目はぎらりと輝いている。裏があることは、誰の目にも明らかである。

「なるほどのお。うまいことを考えたものじゃ。陛下はわしを最強の武人と信じ込んでおるから、わしを倒せば、お主ら一門は天下に名を轟かす。こんな老人一人、どうとでも料理は出来る、かのお。

雷君、ちよっとおいで」

いきなり凶星を指されて緊張した男たちは、屋敷の中から何者があらわれるか、息を飲みつつ見つめ

ていた。が、出てきたのが子供だと見ると、指をさして大きく嘲った。

「こちらの方々が、お手合わせ願いたいそうじゃ。練習がわりに、軽くお受けしなさい」

男たちはまだ嘲いを止めない。

「ほ、本気かな、ご老人。たとえ相手が誰だろうと、手加減は致しませんぞ」

嘲諧は相手を見もせずと言つ。

「その方がよからう。下手に手加減などすると、命を落すことになるでな。…では、こちらへ入りなされ」

嘲いは憤りに変わった。二人の男は鈍い光を放つ目を見合わせながら、屋敷に入っていった。

「武具じゃが、これを使うんじゃ」

差し出されたのは、笠であった。受け取った雷遊子は、もう少しで取り落とすところだった。笠には、鋼が仕込んであったのだ。

「さ、試してくるんじゃ。いまのお前なら、勝てる」

ぼん、と一つ肩を押されて、少年は部屋の中程へ歩いていった。そこにはすでに、ひとりの男が身支度を整えて待っている。背格好は武達と同じくらい、右手に長めの剣を持ち、ひよいひよいと振り回している。少年が近付いたのに気付くと、その剣をすつと降ろし、威圧するかのようその目を睨んだ。

「拙者は天極門の師範、王史啓おうしけい。一応、お前の名前を聞いておこう。何かあったときには、弔ともしわねばならんからな」

しかし、少年は一行に動じていなかった。

「ぼくは衝派源流の見習い、雷遊子！」

その態度を鼻でいなしながら、男は剣を構えた。少年も笠を右手につけ、やや体を低くする。

「二人ともよいな。…では、はじめ！」

聆諧のかけ声と共に、男が飛び込んだ。剣を中ほどに構えたまま、一気に間合いを縮め、ごく僅わずかな腕の振りで相手の首をはねる——だが、剣は笠によって動きを封じられた。離れようと剣を手前へ引き戻

そうとするが、笠に吸いついたかのように離れられない。

「ばかな！」

ひとこと吐いたこのとき、すでに彼の敗北は決っていたと言っている。普段の、天極門師範の彼ならば、雷遊子の盾術じゆんじゆつがまだ甘いことにも気付いただろう。だが今の彼は、子供に翻弄ほんろうされて頭に血が昇った、一人の男でしかなかった。

あつという間に、少年の笠は男の胸を捉えていた。平らな部分を胸におしつけた瞬間、その柱のごとき足が、大地に打ちすえられる。

ダンッ！

大地の力を集めた、まさに『山』の一撃である。それをまともに受けた男は、なすすべもなく、その場に崩れ落ちた。

聆諧がその体を無造作に引きずり、事の次第を茫然と眺めていた史栄に投げてよこす。その重みに我に

17 第五回 盾の勇者

帰った男は、顔をこわばらせながら門を出て行った。去り行く男たちを見ながら、首を振る朧が口を開いた。

「ここも、見つかってしまったようじゃな。こうなつては、落ちついて修業もできまい。雷君、最後にいくつか口伝をやるう。よく聞いて、覚えておくとうい。そして、明日にはここを發つのは。よいな」

「はい、朧先生」

雷遊子が言った。手の中の笠は、彼にとつてもう重くはなかつた。

八

翌朝、まだ日が昇りきらない頃、すでに少年は、旅支度を整えていた。奥から朧が、いつも通り、足音一つさせずに近寄ってくる。

「行くかな」

「はい。朧先生、いろいろありがとついでにしました」

ぺこり、と頭を下げる少年に、老人はうなずきかけた。

「出る前に、いいものをやるう。ま、饑別という奴だの」

言いおわると奥へ入る。再び出てくると、手には大刀を携えていた。刀を持った手は、だらりと垂れ下がっている。突然、刀の刃がぴょこんと跳ね上がった。腕を動かさず、手首だけで刀を操っているのだ。

「これがなにか、わかるかな？」

少年はまじまじと見て、おそろおそろ答えた。

「大刀……だよな」

「違うの。これはただの刃物じゃ」

雷遊子はさらにじつと見る。幾度見たところであらう。

「わからないや。どう違うの？」

「刃物とは、ただ尖つた金物にすぎぬ。振り回されて、悪くすれば確かに命も落すがな、しかしそれだけじゃ。」

…大刀とは、こういうものを言う——」

雷遊子はわけもわからず、目の前にかざされた刀をじつと見る。何度見ても同じ刃である。

と、いきなり背筋に冷たいものが流れた。いったい何が起こったのか、問おうと顔を上げて老人を見る。いや、見られない。彼の目は、目の前の刀からどうしても離せないでいた。頭では離そうとしているのに、目だけが吸い付いたかのように動くことができない。目の前で、刀が見る間に変貌していった。ただの研いだ鉄から、凍り付くような光を放つ『何か』へと。

その光が薄れ、ついにもとの鉄に戻っても、彼の目はまだその場から離れなかった。

恐かった。いつまたあの光を浴びるかと思つと、耐えられないほどに恐かった。その恐怖の表情を見て、明諧は幾度か頷いた。

「見えたようじゃな。これが大刀、これが人を斬る

武器というものじゃ。お前さんは二度とこれを見てはならん。次に見たときは、死ぬときだと心得るんじゃな」

その言葉に救われたかのように、雷遊子はその場にへたりこんだ。

九

「失敗か…」

まだ若く張りのある、しかしとてつもなく重い声が、あたりを支配する。

黒い影があった。人形のごとき固い影の中で、その手の部分だけが別の生き物のように微妙に動いている。その影の前に、男が数人立っていた。ぼんやりとした灯籠のあかりが映し出したのは、一月ほど前、宿屋で武達と雷遊子にこっぴどくやられた男たちだった。

「すいやせん、旦那。今度あ、しくじりやしません

19 第五回 盾の勇者

から、も一度、お願エしやすよ。ちいところこんとこ入り用で…」

何が入り用なのかは、誰にもわからなかった。手の影が不意に大きく動くと同時に、その場にいた三人の男たちは血煙と消えてしまったのである。断末魔を上げる暇すらない、まさに一瞬の出来事であった。

同時に、灯籠のあかりも消え、あたりは闇と化した。

「雷遊子か。まさか、妙連の弟子が来ようとはな…やはり雷天人、光莫には聡いということか…」

「いかが致しましょう」

いつものまにやら、黒衣を着た男が一人、血煙の中に立っている。手にした灯火が歩むにつれてゆらゆらと揺れ、あかりに照らされた黒衣が、闇の中で不気味に光っている。

「うん。できるなら、妙連に気付かれずに済ませたところだが——」

「妙連には、もとの仲間たちが襲いかかっております。そう簡単には戻れませう」

黒衣の男はそう言うと、低く笑った。影が揺れる。「侮るなよ。すでに匣連が正気を取り戻している。万が一、六連呪が全員揃おうものなら、お前の術とて役には立たないぞ」

黒衣の手が下がった。下から照らされたその顔は、いささか不満げに見える。

「ならばなぜ、妙連を生かしておくのですか？」

影の声が低くなった。

「奴が要る。だが、今はまだまずい。もう少し出来上がってからでなければ、会わせても意味がない。」

——私のようになるのが落ちだ」

黒衣の頭が垂れる。

「少々、出過ぎました。」無礼を」

「構わない。考える頭のない奴は好かないからな。さて、わかったら次の仕事を頼むぞ。」

雷遊子とあの娘を見張れ。そして、その居場所を例の連中に流せ。あの印を欲しがっている奴らにだ。ただし、お前自身は手を出さなよ、いいな」

「は…」

言葉が消えるより早く、その気配は消えていた。後にはただ灯火^{ともしび}だけが、さきほどと変わらずにゆらゆらと揺れている。影しか見えなかつた男が、ふとそのそばに寄り、手を延ばす。

灯^{あか}りに照らされたその腕は、先ほどの声の主とは思えぬほどに老いていた…

十

鋼入りの笠を頭によいしよと乗せて、明諧の家を出た少年の背中に声がかかってくる。

「さあ、行こー」

彩花だった。あまりにも明るすぎるその声に、彼はなにか違和感を覚える。まだ先ほどの恐怖が抜け切っていないのだ。それでも違和感の元をなんとか辿^{たど}って、ついに見つけた。

「行こつ、て…どこに？」

「どこでもいいのよ。きみ、旅してるんでしょ？あたしもついて行くわ」

「だって、きみは…」

「『きみ』なんて呼ばないでよ。『彩花』って名前があるんだから。前に言わなかつたっけ？」

「自分だって『きみ』って呼んでたくせに…」

ぼそぼそと言う少年の言葉に、彩花が振り返る。

「なんか言った？」

彼女の言葉に、なぜか雷遊子は逆^{さか}らに難^{たが}いものを感じていた。

「『彩花』が堅^{かた}苦しいっていうなら、『彩ちゃん』でもいいわよ。きみのことも『雷ちゃん』って呼んであげるから」

雷はちよつとむつとした表情になる。

「呼び方なんてどうでもいいけど、なんでぼくにいて来るの？言っとくけど、ぼくはお仕事で旅してるんだからね！」

21 第五回 盾の勇者

「お仕事って言ったって、その変な袋を届けるだけなんですよ。あたしも家がわからなくなっちゃって行くところないし、旅もしたかったし、ちょっといいわ。」

『旅は道連れ』よお。二人の方が心強いですよ。」

言いながら少年の背中をどんとどんと叩く。その叩き方は妙に柔らかく、それで雷遊子はふと思い出した。彼女が以前、変な男たちに襲われていたことを。

「そっか…そうだね。二人の方が、心強いよね。」

まっすぐに少女の瞳を覗きこんで、少年がにっこりと笑う。少女の頬は、見る間に朱あけに染まっていた。

「な、何よ。言っとくけどね、あたしが、このあたしがついていってあげるって言ってるのよ！」

聞いているの!? あたしがよ。きみが一人じゃあんまりかわいそうだから——」

真っ赤になって言い訳を続ける彩花を横目で見ながら、雷遊子はいつまでも、くすくす笑いながら歩いていく。

むかしのはなしである。

注

- 一 刀…日本で言う大雑刀（なぎなた）
- 二 禁軍…皇帝の直屬軍隊